

聖書:エペソ人への手紙3章14~21節

説教:キリストの愛を知ることができるように

はじめに

中東でまた新たな戦争が始まり、多くの方が亡くなっています。同じ人間なのに、もっと仲良くできないのだろうかとかだれもが考えます。そんななかでこんなことを言う人たちもいます。「自分たちの神だけが正しいと言い張る宗教があるから戦争が起きる。宗教は危険である。」そうするとキリスト教も危険な宗教なのではないでしょうか。

二千年前エペソの教会で、同じキリストを信じていたユダヤ人と異邦人との間に聖書の解釈を巡って争いが起こりました。それでパウロがこの手紙を書くことになりました。一つの教会に集まってもこんな状態です。まして地球全体ではどうなるか。仲良くするのはとても無理な相談なのか。戦争が絶えないこの世界に対し、キリストを信じている私たちはなにができるのでしょうか。きょうはパウロの祈りから、そのあたりのことを考えていきます。

## 1 御父に祈る

### 1) 家族あるいは民族、国民

そこでまず15節から見ていきます。「天と地にあるすべての家族の、「家族」という呼び名の元である御父の前に祈ります。」このところについては、聖書の欄外に説明が付されています。「家族」はギリシャ語で「パトリア」と言い、「父」は「パテラ」と発音し、発音がよく似ている。また聖書によれば、神がアダムとエバを造って、最初の家族を備えたわけですから、確かに家族のルーツは神にまでさかのぼることができます。そんなふうにとば遊びをするようにしてパウロはわざわざ「家族」ということばを使うのには理由があります。この家族と訳していることばは、民族とか国民という意味もある。じつはこのことが後で重要になりますので覚えておいてください。

### 2) 信仰によってキリストを住まわせる

その御父にパウロがこのように祈ります。16, 17節。「どうか御父が、その栄光の豊かさにしたがって、内なる人に働く御霊により、力をもってあなたがたを強めてくださいますように。信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように。」短くまとめるならば、「御霊により信仰によってキリストを住まわせ」て

ください、という祈りです。でもどうでしょうか。どうしたらキリストを住まわせることができるのか、具体的な事がこれだけではわからない。そこで次のところを読みすすめてみましょう。

## 2 キリストの愛を

### 1) 愛に根ざし

17節後半から19節。「そして、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、すべての聖徒たちとともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。そのようにして、神の満ちあふれる豊かさにまで、あなたがたが満たされますように。」

イエスは、砂の上ではなく岩の上に家を建てなさいとも教えられました。それと同じように信仰は、愛というところに基礎を置くのだということです。愛と言ってもいろいろあります。私たちはキリストの愛に立ちます。

### 2) 理解し、知る

ではキリストの愛とはどのようなものか。たとえば、ヨハネの福音書3章16節、「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された」というみことばはだれでも覚えている。覚えているから理解しているとは言えません。「その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになるように。」まるで愛という実物が目の前にあって、メジャーで細かく測るような表現です。理解するということはそれくらいのことなのです。

ここで、少しひねくれた見方かもしれませんが、「人知をはるかに超えているものを、どうやって知ることができるのか。そんなことできるのか。」と思った方がいたかもしれません。もちろん矛盾しているわけではありません。キリストの愛を知れば知るほど、自分がそれまで想像していたものよりもっと深かった。そのようにして新たにキリストの愛を発見していく。新たな発見をするたびに、人知を越えていると思わされていく。そういうプロセスをたどりませう。

たとえばキリストの愛と聞いて、私はひとつの箱のようなものを想像していました。その箱は、人

の手幅くらいの大さだと勝手に思っていた。それがいろいろなことを経験していくうちに、とても私たちが想像できる容れ物には入りきらないということがわかってきました。

そんなキリストの愛に私たちは立ち続けます。それほどすばらしいキリストの愛をどのようにしたら知ることができるのでしょうか。それが次の問題になります。

### 3) どのようにして

それではどうしたらキリストの愛を知ることができるか。パウロはすでにこう書いていました。2章5節。「背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。」自分がいかに罪深いものであるかを知れば知るほど、神の救いの恵み、すなわち神の愛がわかる。ただこれだけです。でも自分の罪を知るのが怖いという人がいます。大丈夫です。一人でするのではない。神と一緒に私たちの罪のところに降りてこられます。この方にゆだねながら、罪を振り返ります。そのようにしてキリストの十字架の愛の広さ、深さを教えられ、キリストが住んでくださいます。

### 4) すべての聖徒たちとともに

それはひとりですることでしょうか。18節冒頭に「すべての聖徒たちとともに」ということばがあります。じつはこれが鍵になる。皆さんはこんなふう考えたことはなかったでしょうか。教会はかけっこをしているところで、信仰熱心な人たちが先頭をアスリートのとごとく突っ走り、ほかの人たちはずっと後ろのほうを息もたえだえよたよた走っている。そんな姿です。しかし聖書はなんとやっているか。教会には、エリートクリスチャンとかダメクリスチャンとかそんな人たちはいない。みないっしょです。キリストの愛を知るという点についても、皆一緒に知っていくことになる。これは大切です。

このことから二つのことを教えられます。一つ目。私は信仰が弱いと思っている人にとって、これはよい知らせです。自分はその人のようにはなれないと劣等感を持っている方は、安心して下さい。弱い人が取り残されることは絶対にない。キリストの愛を先に知った人たちが分かち合ってくれて、一緒に走ってくれる。

そして二つ目。今度はその反対です。自分はほかの人より優れたクリスチャンだと思っている人に対して、これは戒めです。あなたがもし、私はキリス

トの愛をほかの人よりもよく知っていると自慢している暇があったら、その知識を惜しみなくほかの人たちに分け与えなさい。それが教会ですと教えています。

## 3 神の御力

### 1) 願うところをはるかに超える

その結果、教会に何が起きるのでしょうか。20節に、「私たちのうちに働く御力によって、私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて行うことのできる方」とあります。このことについてですが、ときどき「どのように祈ったらよいでしょうか」と質問されることがあります。あるいは「こんな祈りは神に聞いてもらえない」と遠慮される方もいます。神の前に立って祈るとき、私たちは真剣にならざるをえませんからこれは切実な問題です。しかしいっぽう祈りの不思議ということもしばしば経験することがあります。こう祈ろうとか、ああ祈ろうと事前に心の中で用意していたのに、いざ祈り始めると、思ってもみなかった方向に祈りが導かれ、自分でも驚くことがあります。これこそまさに「内なる人に働く御霊」の働きだとつくづく思うのです。このように神は私たちの祈りも教えてくださって、教会のみなさんがいっしょにキリストの愛を経験していきます。

### 2) 一つとされていくことを世に示す

どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。そのことは以前の箇所がありました。2章15、16節。「こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、二つのものを一つの中からだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」

私たちは、主の前に罪を告白し、キリストの十字架を通り、かつては二つのものでありましたが、今は一つの中からだに連なるものとなりました。

キリストの愛の深さがわかる。そうしていつのまにか一つの中からだが築き上げられていきます。

この事実を、神は教会をとおしてこの世に示そうとされています。最初のところで「家族」と訳されていることばは民族とか国家という意味もあると言いました。世に戦争のうわさが絶えず、平和が遠くなっていくとしても、神が本当の平和をこの地上にもたらそうとしています。二つのものが二つのままで平和を得ることはできません。必ず一つにならなければならない。それは絵に描いたモチの

ようなユートピアではない。教会のなかですでに始まっている。たとえ世の人たちが希望を見失っていたとしても、教会には和解と平和の希望がある。私たちは、この事実を世の人たちに伝えながら歩んでまいります。